寄稿

釣り大会に寄せて

㈱東北地質　石　川　澄　子

太古の昔、人類の源は海の中にありました。人となってからは胎児の時、母親の中でその進化の様を体験していますが、はてさて、そのことを思い出せません。悲しいかな人の記憶のほとんどは現世のものなのです。

私にとって、魚に対しての最初の記憶は今は亡き、じいちゃんとばあちゃんです。じいちゃんと行った七北田川のウナギ釣り、大井川でドジョウやフナ釣りもしました。学校帰りの遊びといえば、ザリガニを取っては道路になげる。小川を堰き止めて小魚を網で取る。カエルの解剖やヘビの卵を取ったりと、一年中自然との戯れでした。（なんて残酷な！と今は思いますが）

また、魚は夕食のおかずでした。近所に魚屋さんは無く、もっぱら行商のおじさんから買っていました。

その人は自転車でやって来ます。チリンチリーン（子供心にそう聞こえました）ばあちゃんと一緒に通りへ出て、その自転車を止めるのが私の役目でした。「今日は何あるの？」するとその人は、荷台の箱のふたを開けるのです。ドキドキして中をのぞくと、平べったくてヒョットコのお面のような口をした魚が入っているのです。ばあちゃんはその変な魚を12枚買いました。（その時の我が家は12人家族でした）

その変な魚の塩焼きは、身がホクホクしてとてもおいしかったのです。そして食べ終わった後のご飯茶碗の中に、その魚の『ビリンコ』とお湯を入れて飲んでいたのはじいちゃんでした。おもむろに真似をして「アー、大人だ」と思った私はまだ小学生でした。

その変な魚は閖上沖でとれる『アカジガレイ』だったのです。手の平サイズでも釣りたてのそれは、最高のご馳走でした。

それから数十年、私はカレイ釣りに夢中の事務員になっていたのであります。海、それは私たちの源なのです。

魚たちに　合掌